

風土



子のあとの机待つなり蛞蝓

(句集『含羞』より昭和二十三年作)

この頃の桂郎師は、「一つづつ分けて粽のわれに無し」など、子供を愛しんだ句を作っています。子供が七畳小屋に遊びに来たのでしょうか。一つしかない机を占領し、何か書き物をしています。依頼された原稿が幾つもあるのですが、子供の問いに時々答えながら成長する姿がうれしいのです。梅雨時の七畳小屋の板戸の隙間からは蛞蝓が入り込んでいます。

一人来て多勢に會ひぬ野分中

(句集『含羞』より昭和二十三年作)

「石橋辰之助告别式」の前書があります。桂郎師はこの年、石田波郷と共に「馬酔木」に復帰しています。かつての「馬酔木」同人であり、その後、新興俳句運動に移った辰之助に別れを告げに来たのです。辰之助は明治四十二年生まれで、桂郎師と同年代です。想うものがひとしおあつたはずで、久しぶりに会う「馬酔木」の仲間や新興俳句系の俳人たちの多さに戸惑っているのです。

一本の村を出てゆく月の道

(句集『月の道』より平成十六年作)

この句は句集のタイトルになったものです。単純に読めば、月明りの一本の道が村を抜け出て続いている景色です。しかし器師にとって月は特別なものです。句集『幻』での亡き妻への絶唱「寒満月妻ののぼりしあとのなし」であるように、月は妻の魂とつながるところなのです。もっと言えば、月は死者の魂の世界です。器師にとって「月の道」は妻の魂とつながる道なのです。器師はこの年脳梗塞で倒れており、死を間近に感じていたはずで、これがタイトルとなった所以です。

鷹に鈴鳩の和毛の花と舞ふ

(句集『月の道』より平成十六年作)

この句は放鷹会で、鷹が放たれた鳩を捕らえた瞬間を表現したものです。鷹狩の鷹は尾羽に鈴をつけています。その鈴が中空で鳴りひびき、捕らえられた鳩から和毛が飛び散りました。器師は宙をただよう和毛を「花と舞ふ」と置きました。木当は凄惨な場面ですが、生死を呑み込んだ器師には和毛は花と見えるのです。

うぶすなへ

南うみを

いちにちを軋みて冬の舟溜まり
寒波急木つ葉の如く鳶流れ
数へ日の縄を掴みて何せんと
神の塩振つてはじまる注連作り
藁打つや荒縄の輪に石を据え
氏子らの身を揺さぶつて注連作る
街灯の吐きつづけをり夜の雪
白菜を刈つたる鎌を雪に刺す
うぶすなへ御降りの雪踏み固め
初歌仙はや徳利をたおしけり
寒晴や人語鳥語のすきとほり
寒林にひつかかりつつ夕日退く



竹間集

同人作品



雪 晴

土井三乙

綿虫や裏戸の開いてゐる真昼
冬晴や遠山並へ窓開く
朝々のいつもの道を初詣
年新たな書を読むための眼鏡にも
松の枝を大きく揺らし初鴉
湯気に透く細りし四肢よ初湯浴
雪晴を飛んで光となる鳶

良寛忌

高村 令子

眩きの一言重し霧襖
庭師来て晩秋の空鳴らしけり
おでん種のやうな人々過疎の里
そつとして欲しき日溜り返り花
悲しめばえのころ草のタクト振る
山里にさり気なく冬来たりけり
ほどほどに暮して一人良寛忌

冬すみれ

林 いづみ

手探りの変異ウイルス去年今年
風花の空にとけゆく子等のこゑ
西方の守護の白龍淑氣満つ
杓置かぬ手水舎濡つ寒四郎
裸木の梢は月星愉しめり
虎落笛東京タワーを遠まきに
句碑の辺のまはひほつほつ冬すみれ

彩マスク

小林 共代

初日の出カウントダウンの薬師堂
櫛には櫛の御空初薬師
榛名山鳥居の凹松風を呼び
初茜榛名の富士も湖も
風はや地に下ろされし鬼瓦
ありがとう友の作りし彩マスク
何につけ偲ぶことあり枯木星

初時雨

間島あきら

初時雨野を行くうしろ姿かな
富士聳つて景の定まる年の市
連山の影のむらさき初景色
根曲がりの竹に初日の届きをり
新春の顔や北口みなみ口
裏白や残る歳月数へをり
裸木となりて見えくるものあまた

風邪の神

中根 美保

ひそやかな嚏もらしぬ乳母車
あづかりし犬膝に抱き去年今年
むらさきを選び初買の着尺かな
冬の園学習田に隣りけり
葉牡丹の離ればなれに渦増せり
風邪の神人と会はねば来ずなりぬ
極小の野鳥図鑑や探梅行

古 曆

内藤 静

探查機下り朗人氏の昇る冬天
追悼を深紅にこめてポインセチア
ありつたけ啖呵をならべ漱石忌
熱爛の二勺にこころ鎮めけり
声聞けば和める人よ実万両
笹鳴や眉根を寄せて蕎麦を切る
古曆風の募つて来るらし

大根煮る

土井ゆう子

つつがなき暮しゆるりと大根煮る
晩年の先知るはづもなく花八つ手
猫のミィー退院の報縁小春
湯豆腐の肩揺れふふと笑ひけり
雪催コーヒー豆を挽きましよか
日に透けて立つ裸木にある未来
朗読劇の津軽じよんがら雪しまく

初晴の海

森高

武

蓮池はぬた場の如し初氷
朱の橋を飛んで潜りて鴨の群
ローストの肉を余熱に師走かな
自在鍵の頃の雑炊熱すぎて
青深き海を確かむ大晦日
初晴の海へ真つ直ぐ下る道
元旦の波間飛び出す鴨の群

みぞれが雪に

浜

福恵

メタセコイアを線描にして十二月
ノックをすれば犬が応へて雪催ひ
みぞれが雪に目の醒めるまで眠れよと
地球の疫病攫へよ冬の流星群
鶏日や聞こゆるもののみなとほし
雪安居耳が小さくなつたらし
卯酒とろりと夜の更けてゆく

冬の梅

門伝史会

鷹舞へり日差せば変はる海の色
吊橋にバンジージャンプ冬紅葉
柿の色吸い尽くしたる落暉かな
「はやぶさ2」の軌跡のよぎる冬の月
漱石忌皿をとび出す車えび
造作なく傘寿過ぎゆく赤セーター
句籠りに倦みて人恋ふ冬の梅

山河集

同人作品



南うみを選

早暁の白湯のぬくみや一葉忌
浦西風や小舟を吊りて女棲む
枯蓮に朝日子折れて届きたる
鯛焼を謝らぬ子の手にも遣る
息白し朗読会の反戦詩

小原美美子

藪巻の見得を切ると地を踏み
枯芙蓉まだまだとほく飛べるはず
凧や地べたの声を拾ひゆく
刃物屋に足を止めぬる十二月
数へ日や信州鎌に稲穂の絵

雨宮桂子

餅掲きの父の腕のまぶしかり
山眠るごとく巖父は端坐して
廻礼の赤子を抱けば潮の香

山田健太

深雪より引き出す鹿の血糊かな
老妻のめり込んでゐる炬燵かな
寒晴や富士の上なる紺円盤
パソコンの再起動待つ冬の蠅
寒稽古施無畏に至る剣の道
びんづるさん撫でずに帰る年の暮
第九聞き冬の星座の中に立つ

杉本葉子

頑なに黙を通して漱石忌
酔へばまた昭和の話根深汁
夕闇のすぐそばそこにあり白障子
否といふ目くばせしたる冬帽子
止め石に歩を返されて竜の玉

岡尚

年移る

柿沼 盟子

極月の金色の夕歸社歩く
蹴られたる枯芝の香のあをさかな
北風強し膝の前後に湿布葉
数へ日の病院に日とオルゴール
目の前に降りし鴉の息白く
暴れたる葉叢にすつく花水仙
真ん中に蜜柑山なす盆を置き
除夜の鐘数へぬうちに終はりけり

わが背丈まだちぢまぬよ年新た
パソバンクーバーの姉一家とコンの小さき画面に御慶かな
四日はや皺を伸ばして常の服
初仕事焙じ茶熱く熱くいれ
背の痒さもてあましをり冬旱
風上に向かい居並ぶ寒雀
じんわりと寒の雨吸ふ夜の大地
着ぶくれて自動改札抜けられず
飛蚊症に白すぎるゲラ寒灯下
帰途一步出づれば日脚伸びてをり
冬日浴ぶ在宅勤務の昼休み
小豆粥香れば仕事切りをつけ

風土独語／南 うみを



枯蓮に朝日子折れて届きたる

小原美英子

この句は枯蓮に朝日が届いたところを描いています。工夫は「朝日子折れて」です。本当は枯蓮がぎくしゃくと折れ曲がっているのですが、日差しが屈折しているかのように想像できます。痛々しさが日差しにまで及んだと感受したのです。

大縄跳び十人呑んで昂れり

高橋まき子

「呑んで昂れり」がこの句のポイントになります。回転する大縄に入っていく様子で大縄の躍動を、まるで大蛇のごとく捉ええました。力強さに溢れています。

藪巻の見得を切ること地を踏めり

雨宮 桂子

「藪巻」は雪折れから守るために菰や縄で樹木を巻き付けます。木によってその形が変わり、一つは歌舞伎の見得を切る姿に見えたのです。「雪吊り」とのギャップが面白いです。

看護師に囲まれてゐる毛布かな

根岸 善行

「看護師に囲まれてゐる」から、この「毛布」は医療のためのものであることが解ります。これから手術か、手術の後か。作者の緊迫した息遣いを感じます。自己客観化に徹しています。

老妻のめり込んでゐる炬燵かな

山田 健太

俳句は読み手の想像を加味して完成します。「めり込んでゐる」で、炬燵にめり込むように、挺子でも動かぬ老妻が読み手に見えれば、この句は完成します。作り手の表現力が鍵になります。

西行の桜落葉の行方かな

岡本 尚子

一連の句から、これは京都、大原野の勝持寺の「西行桜」を詠んだものです。若き西行はこの寺に通い、桜を手植えています。「桜落葉の行方」とその後の西行の境涯が重なります。

寒稽古施無畏に至る剣の道

杉本葉王子

「施無畏」とは衆生の種々の畏怖の心を取り除いて安心させ救済することを言います。作者は剣道の高段者です。「剣の道」を究めようとする信念が現れています。

二度三度目秤で選るにらみ鯛

渡辺 やや

「にらみ鯛」は、正月に二尾の小鯛を藁縄で結び、歯架や櫛を挿して竈の上に相対して掛けることを言い、後々に汁にして食べ、邪気を祓うのです。それに見合う小鯛を目で選んでいます。

否といふ目くばせしたる冬帽子

岡 尚

これも目で意思表示している世界です。冬帽子を被った頑固そうな老紳士が想像されます。

風土集



南うみを選

大縄跳び十人呑んで昂れり 逗子 高橋まき子

枯芝は絨毯子等を放ちをり
冬麗や四角に切り取らるる空も

ぬくぬくと鼻は冷たき炬燵かな
鈴の音や兄と別れし年の行く

虎落笛振ちる姿勢を強ひられて 上尾 根岸 善行
隙間風注射を待てる尾骶骨

看護師に囲まれてゐる毛布かな
家中を腹這ふ生活寒に入る

寒中やなかなか効かぬ痛み止め
停車時間だけの再開冬夕焼 相模原 岡本 尚子

風花や琵琶湖の見ゆる東照宮
鯖街道終点の碑やゆりかもめ

西行の桜落葉の行方かな
荆髪の鏡石なり冬木の芽

前略のままの空白冬の月 宇治 渡辺 やや

どよよんと匙重くなる葛湯かな
鯛焼の頭の方は弟に

二度三度目秤で選るにらみ鯛
もつれ糸解かれぬままに年暮るる

ある人は屋根に上がりて日向ぼこ 水戸 山田 健太
埋火の如く読み継ぐ漱石忌

袖口をちよつと指出て春着の子
上役の笑ひ上戸のおでんかな

白菜を取り出す袋びりびりに
肌寒し君あたたかくおはすかな 三豊 磯崎 啓三

日輪に手を差し伸べぬ朝寒き
秋深みひのきの家の匂ひけり

月光のすさまじ死者は眠るのみ
ふるさとの闇にくるまる夜寒かな